

同志社大学

2015年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2016年 2月 16日提出

所 属	職 名	氏 名
心理学部	教授	中谷内一也
研 究 題 目	災害スクリプトに潜む脆弱性の検討と対処行動の促進、リスク認知上の波及効果 (科研費研究・基盤研究(B)24330189 と同じ)	
研 究 成 果 の 概 要	<p>近年、減災にアプローチする心理学的研究分野では「リスク認知パラドクス」が強調されている。これは個人の災害リスク認知と実際の減災のための準備行動との関連が希薄、あるいは、まったくないことを意味するものである。本研究はこのリスク認知パラドクスを乗り越えて、高いリスク認知を災害への準備行動へと結びつける方法を模索するものである。</p> <p>一般に、自分の被害に対しては楽観バイアスや正常化偏見が作用し、災害リスクが高いことを理解していても、実際の準備行動がとられにくいことにある。これは逆にいうと自分以外の重要他者(significant others)が高いリスクに曝されている場合には、そういったバイアスや偏見を抑制し、現実の準備行動に強く動機づけられる可能性があることを示唆している。そこで本年度は、未成年の子どもをもつ母親を対象とし、自分の子どもが災害に合うという想定でメッセージに接することで、被害を回避するための情報を積極的に取得するようになるという可能性を検証した。</p> <p>実験室実験の結果、自分の子どもが被災するイメージを持った母親は、被害を抑止するための方法を理解するためにより長い時間をかけることが明らかとなった。一方、リスク認知そのものには変化がないことも示された。これらの知見を防災政策に活かすための方略について検討した。</p>	